

昭和は日本が大きく変化した時代です。大きな戦争が起こり、人々は貧しく苦しい生活に耐え、戦争後は勤勉に働き日本を豊かにしました。工業が盛んになり、若者は農村を離れて街で働き暮らすようになり、都市は巨大になっていきました。人々の暮らしも変化し、多くの道具が電化製品に代わり、自動車での移動があたり前になりました。そして公害など今にいたる環境問題の多くが昭和に始まっています。

子どもたちにとって昭和は、もはや遠い過去の歴史です。一方、親・祖父母の世代にとっては懐かしさを感じながら、まだその時代感覚の中で暮らしている人も多いでしょう。

今回の「むかしのくらし展」では、昭和の世界を子どもたちに伝えることを目的に、昭和の新潟市をふり返ります。それは、親や祖父母世代の幼少期・青春期の暮らしを伝えることにつながります。ただ、昭和という時代は長くバラエティに富んでいることから、すべてを伝えることは困難です。そのため、子どもの視点を意識しながら伝える項目を絞りました。

まず一つの項目は「戦争」。昭和二十（一九四五）年の終戦から今年で

七五年が過ぎました。戦時中、小学校の児童は「少国民」と呼ばれ、子どもたちは幼い戦力、将来の兵士として育てられました。その状況を伝える当時の教材などを紹介します。また、新潟市にもアメリカの爆撃機B29が飛来し、船が触れると爆発する機雷を港に落としていきました。その一機が新潟市内に墜落しており、その残片を展示します。

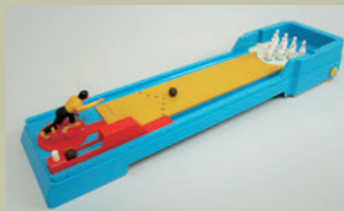
二つめは「くらしの道具」。電化製品が家庭で普通に使えるようになったのも昭和、なかでも戦後の特徴です。それにより生活スタイルも変わりました。昭和三十年代に「三種の神器」と呼ばれたテレビ・電気冷蔵庫・電気洗濯機をはじめ、昭和期の電化製品を紹介します。



白黒テレビ

三つめは「子どもの遊び」。やんちゃな子どもたちが自分たちで工夫しながら遊ぶものから、電気で動くおもちゃやテレビゲームへと変わってきたのも昭和です。昭和初期のおもちゃの

ほか、三十年代の「だっこちゃん」、四十年代の野球盤やボウリングゲーム、五十年代末に登場したファミコンなど広く知られたおもちゃを展示します。



ボウリングゲーム

そして「新潟の昭和史」。これは昭和に起こった新潟市の事件・出来事を一〇項目に絞り込んで紹介します。子どもたちと同じように歴史としての視点に立って情報を伝えられるよう、昭和時代の記憶がない平成生まれの学芸員が一〇項目を選び解説することになりました。その中には昭和十二年の万代



昭和30年代の中央区碓谷小路

昭和時代を振り返ってみると、私たち日本人は多くのことを学びました。戦争がもたらす悲惨さ、勤勉による豊かさや文化的な生活の獲得、それを得るために犠牲にした自然環境からの逆襲など。こうした昭和という時代の明と暗の部分、ご自分の経験から子どもたちに伝えてあげてはいいかがでしょうか。現在の厳しい状況のなか、これからの困難に立ち向かい、未来を目指そうと昭和に学ぶことは多いと思います。みなとびあがそうした場になれば幸いです。

本展の会期は十一月三日まで。観覧無料です。ご家族そろってのご来館をお待ちしています。

(こばやし たかゆき 副館長)

おすすめの1冊

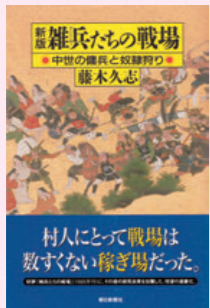
『雑兵たちの戦場 中世の傭兵と奴隷狩り』(新装版)

昨年九月、新潟県出身の歴史研究者藤木久志氏が亡くなりました。藤木氏は戦国大名研究や、歴史上の日常生活や習俗など社会史と呼ばれる分野の研究でも知られています。

本書も社会史の研究成果をまとめた本の1冊で、戦国時代に戦闘要員やその補助要員として流れ込んだ「雑兵」たちに焦点を当て、雑兵の登場の背景、戦場での人物の略奪の実態についてまとめています。また、戦争状態から村の住民を守るために築かれた「村の城」の利用など戦国時代の実像に迫っています。

「戦場の雑兵たち」節中の、上杉謙信が領民の口減らしのために関東へ出兵し、戦場で人身売買を容認したという記述は殊に有名です。今日では反論も出ている記述ですが、新潟県出身で上杉家の研究も行ってきた藤木氏があえて問題を提起したことについて、我々が受けとめ、考えるべき点もあるように思います。

(田嶋 悠佑 学芸員)



藤木久志 著  
朝日新聞社 発行  
2005年6月

歴史さんぽ

新川

新潟市西蒲区・西区

新川は今年通水200周年を迎えました。新川は内陸にたまった水を排水して水害を防ぎ、新しい水田を拓くために、江戸時代に開削された放水路です。越後平野ではこうした放水路が江戸時代から現代まで数多く開削されました。その河口は20カ所に及びます。新川は大正6（1917）年に河川法準用河川となり、この時点で早通川の流路を含む鎧潟から海までの流路が新川となりました。現在の新川水系は燕市から西蒲区を経て、西区で海に注ぐ二級河川として、今も流域の排水において重要な役割を担っています。

新川の沿川には、多くの排水機場があります。低湿な地域の多かった西蒲原地域では、明治中期以降各地で機械排水が導入されていきます。大正末期以降は機械排水が普及し、昭和20年代以降は国の事業によって、新川水系に新川右岸排水機場をはじめとする大型の排水機場が建設されていきます。この事業は湿田の乾田化を目指して新川流域の用排水を整備するもので、新川に排水を集中させる計画でした。そのため、大量の水を流下させられるように新川の改修も進められました。

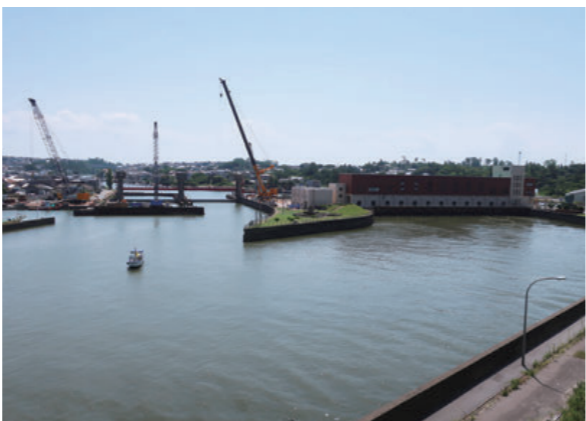
また、戦後の新潟では資源不足の中、地下の水溶性天然ガスが燃料として盛んに利用されました。この天然ガスの採取を目的として地下水が大量に

汲み上げられたため、各地で地盤沈下が発生しました。新川流域でも地盤沈下により排水不良等の問題が発生し、この対策として新川河口排水機場を建設し、新川流域の排水機場の運転を遠隔制御できるようにしました。新川河口排水機場の建設とこれに伴う新川漁港の整備は、新川河口の景観を大きく変化させました。なお、現在の新川河口の様子は、内野新川大橋から一望することができます。

昭和40年ごろから、西区内野周辺で市街地が広がっていきます。昭和50年代になると住宅地の増大や開発の進行により、雨水の水路流出による湛水被害が発生するようになります。農地の水害を防ぐとともに都市水害の予防が必要となったことから、新川水系と周辺の水系に放水路や排水機場を整備して西蒲原全体の排水系を分散させ、新川への排水集中を緩和させました。

河川として整備を重ねてきた新川の歩みから、地域の環境と社会の歴史的な変化が見えてきます。

森 行人 (もり ゆきひと 学芸員)



内野新川大橋から見た新川河口